

大学は何処へ —ポストコロナ時代の大学とは何か—



吉見俊哉
(東京大学)

Chapter 1

パンデミックと大学の使命 : 移動の自由と接触・交流・対話

21世紀はどんな時代か？

継起する反動：

- 2001 米国同時多発テロ
- 2008 リーマン・ショック
- 2016 Brexit+トランプ米政権
- 2020 コロナ・パンデミック

←1980年代以降の新自由主義的
グローバリゼーションの臨界



暗転する20世紀



人類史上で繰り返される感染症パンデミック

1. ペスト・パンデミック: 14世紀のヨーロッパ
←モンゴル帝国 ⇒ローマ教会の権威失墜
2. 天然痘パンデミック: 16世紀の新大陸
←大航海時代(征服者) ⇒先住民文明の崩壊
3. コレラ・パンデミック: 1817~23
←大英帝国拡張: 植民地インドと英国の直結
(日本は、1858~ ←黒船来航・開国 ⇒幕府崩壊)
4. インフルエンザ・パンデミック: 1918~19
←第一次世界大戦 ⇒戦後の忘却
5. コロナ・パンデミック: 2019~?
←グローバル化 ⇒???

原因はすべて
グローバル化



対策はすべて
マスクと隔離

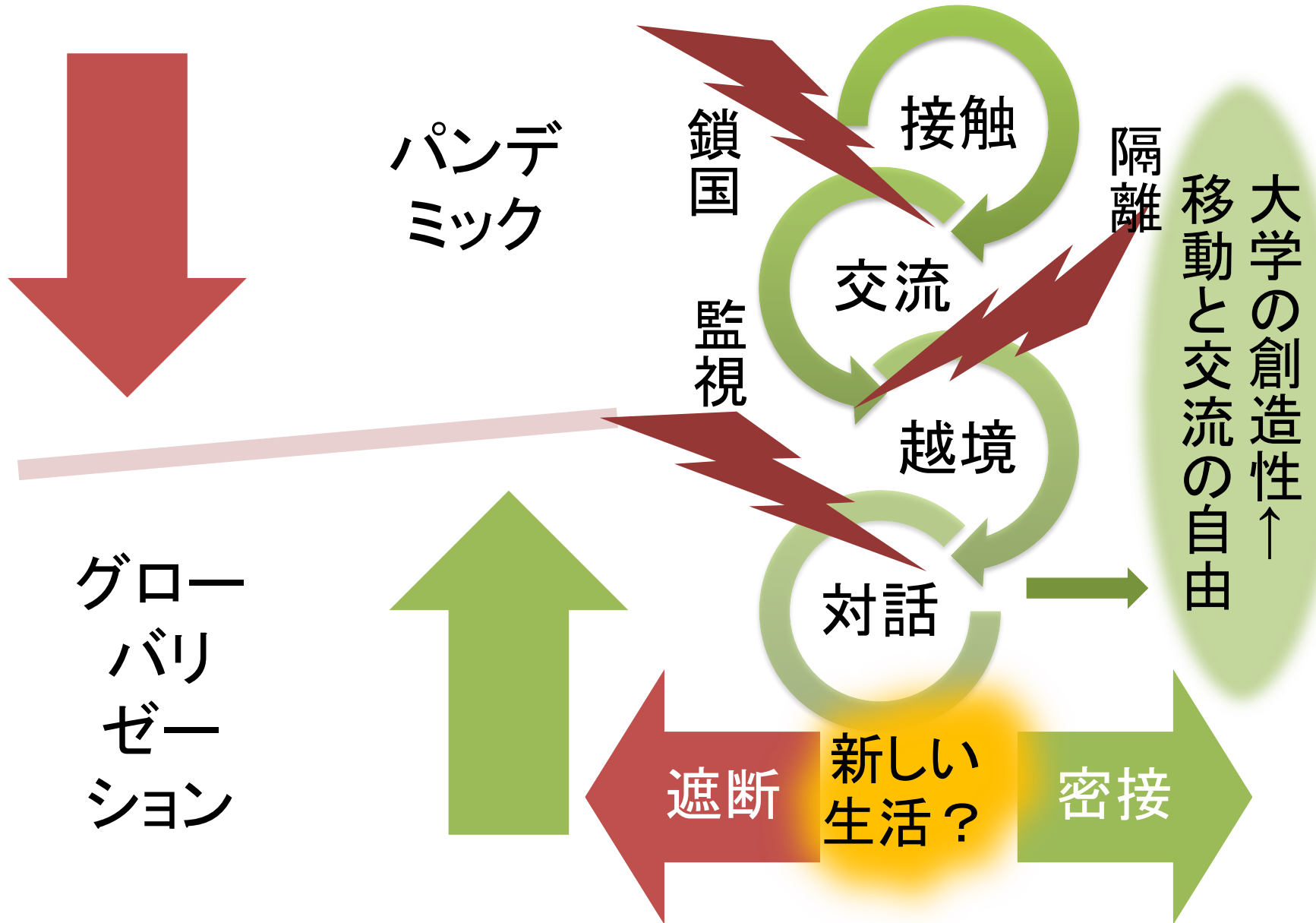


結果は文明の
崩壊から忘却
まで多様

危機の長さで異なる結果: 14、16世紀の崩壊と近現代の忘却

17~18世紀に
は起きていない

歴史の振り子の中のポストコロナ時代



原点の戻る：移動の自由としての大学

● 中世都市ネットワークを基盤にした大学の誕生

- ボローニャ大学 1158年 ←神聖ローマ帝国皇帝
- パリ大学 1231年 ←ローマ教皇

● ユニヴァーシティ＝教師と学生の協同組合

←移動する人々(商人、聖職者、知識人) ⇔ 都市支配層

⇒教皇権・皇帝権を利用した知的移動民たちの特権

⇒「リベラルの知」の場としての大学(リベラルアーツ:自由七科)

→宗教改革:ウイクリフ、フス、ルターの聖書主義

● 大学の増殖：汎ヨーロッパ的大学システム

:教育内容・方法の統一性、ラテン語と国際教授資格

↓崩壊へ

a. 領邦国家＋宗教戦争→汎ヨーロッパ性の崩壊

b. グーテンベルクの印刷革命:写本の知→印刷本の知

コロナ危機と移動の自由としての大学

● Stay Home: 「移動の自由」の禁止

● Social Distance: 社会的距離

欧米人: キス、ハグ、握手、おしゃべり ×

日本人: おじき、寡黙、集団の壁 ○

● 三密(密接、密集、密閉) 日本特有?

● New Normal: 新しい日常とは?

いかにして越境するか?
どんな対話の場を作るか?

当面の解答:

1. オンラインでの越境・対話
2. 道路、公園、ベランダ(屋上)のコミュニケーション空間化

Comparing Google Trends for Zoom and Slack



Zoomの爆発



Chapter 2

オンラインの爆発と時間の壁の浮上

オンライン化の進展と時間の壁の浮上

オンライン化の2類型

- a. 同時双方向型(同期型) **空間は非共有だが時間は共有**
- b. オンデマンド配信型(非同期型) **空間も時間も共有されない**
⇔ 対面型 **空間も時間も共有** = 学生と教師の共同体

オンライン授業による教育共同化(空間の壁の消失)

- キャンパス間共同授業 ← **同一の時間割**
- 大学間共同授業 ← **同一の学期暦**
- 国際的共同プログラム ← **同一の長期休暇**



壁を越える仕組みは？

効率的・効果的な時間のマネジメント

- **時間の統一**(時間割、学期暦、長期休暇)
- **時間の仕分け**(オンラインの曜日・学期 / 対面の曜日・学期)
- **時間のマネジメント**(複数科目のマッチング = カリキュラム)

時間の壁

大学改革における数々のねじれ

- 18歳人口が減少し続けているのに、大学数・収容力は増加し続けてきた。
- 大学は地方創成の中核となるべきなのに、大学進学率の地域格差は拡大してきた。
- 外国人留学生は増加してきたが、日本人の海外大学への留学は減少してきた。
- 多大な労力が評価に費やされているが、結果が教育研究体制の改善に直結しない。
- 学修の実質化に努力しているはずなのに、学生の自律的学修時間は増えていない。
- 外部資金獲得は増加したが、研究時間、学術論文は減少した(基礎研究力の劣化)。
- 博士学位を努力して出してきたが、博士課程進学希望者は減少し、質も劣化してきた。



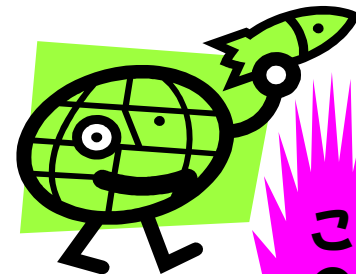
大学教授たちの疲弊：1人3役はこなせない



(出所) 藤村正司「研究生産性——研究費、それとも研究時間?」(『IDE』2017年10月号)より。

図 1-1 1週間の平均仕事時間の推移(※期中)

やっぱり大学を改革
しなくっちゃ、、、



研究者

- 理系は実験
- 文系は著作

二極化する
大学教授

この矛盾を生きる

管理者

- 現状把握
- 制度設計
- 意見調整
- 人事管理

教育者

- 授業
- 指導
- 審査



私をそっとしておいてほしい、、、

いまどきの大学教授は、このすべてがで
きななくてはな
らない!

壁だらけの日本の大学 (甲殻類大学 = 甲殻類社会)

- I. **入試の壁** : 高校生活を投入するが、壁の先はわからない
- II. **就活の壁** : 大学生活を投入するが、壁の先の保証はない
- III. **学年の壁** : 学年ごとの進級 (高校と大学の違いが見えない)
- IV. **学部の壁** : ダブルメジャー、メジャー・マイナーの未整備 (蛸壺的な知識形成)
- V. **時間の壁** : 時間構造の世界とのズレ

「壁」の前提化 ⇒ 内部論理を優先し、独自の進化 (ガラパゴス的進化)



Chapter 3

時間のマネジメントとしての大学改革

有限の時間の中にいる学生と教師

- 就職活動の時期・期間の問題

→ 学修時間を圧迫

- 学部教育が大切だが、授業がつまらないという学生の声も聞こえてくる。

← 忙しすぎて準備できない

- 大学教員の教育力の劣化

← 忙しすぎて高まらない

- 研究力低下の本質とは何か

← 集中できる時間の不足

1. 科目の時間構造：履修科目半減

2. カリキュラムの時間構造：複線化

3. 人生の時間構造：リカレント実質化

就活、会議、管理
業務、外部資金
獲得に蚕食され
る学習研究時間

時間の劣化！



**柔軟で質の高い時間の
マネジメント！**

履修科目数の大幅削減：学生

- 学生が1学期間に履修する科目数：
 - 米国：4～5科目 4年間で30科目程度
→ 1週間に2～3回の授業：ゼミに近い
 - 日本：10～12科目 4年間で60～70科目
→ 1週間に1回の授業：出席して渡り歩く
- 科目平均単位：米国：3～6単位/学期 → 落とせない
日本：1～2単位/学期 → 捨てられる

似て非なる
日米の授業

大学＝意欲ある優れた教師と学生の出会いの場

←「多く、軽く」から「少なく、重く」への転換

- 各週2～3回の開講、予習・復習(実質的な学修時間)の徹底
- 履修のスーパーマーケット型からコーチング型への転換
- 4年間で学ぶ30～35科目の学生視点での設計

開設科目の大幅精鋭化：教師

● 科目過多の授業体制から抜け出せない理由

- 専門知識網羅主義：すべてを教えないと気がすまない教授たち

←学修者の潜在的可能性の過小評価

- 科目数が多いことによる自己満足 ⇔ シラバスの負担感
- チームティーチングの未発達（個人商店社会の限界）
- 非常勤講師への依存（若手雇用、質の凸凹、体系性の欠如）

→ 科目数の大幅削減とチームティーチングの戦略的導入

- シラバスの日本的解釈の是正（脱商品カタログ）

➤ 米国：10～15頁 学生との契約書、シナリオ

➤ 日本：1～2頁 15項目のテーマ＋参考文献

時間に余裕
がない日本

- TAの日本的解釈の是正（キャリアとしてのTA）

➤ 米国：初期キャリア＝トレーニング → 授業＋評価も担当

➤ 日本：教授のお手伝い＝大学院生への経済支援

→ 非常勤講師依存からTA組織化への抜本的転換

クォーター制導入による履修科目数の半減

履修科目半減への障壁:

- 「先生の科目はもうありません？」
- 「先生の科目は倍の回数の授業をしてください？」

← これは、言えない！ むしろ、まず必要なことは、

1週間の履修科目数の大幅削減＝授業回数増

中央教育審議会教学マネジメント指針(2020年1月22日)

「密度の濃い主体的な学修を可能とする前提として、授業科目の精選・統合のみならず、同時に履修する授業科目数の絞り込みが求められる」

セメスター制からクォーター制へ: 科目単位数を減らさない!

週1回15週＝2単位



週2回8週＝2単位

夏休み(遊び=創造)から考える学年暦

4月入学

春クォーター
4~5月

初春クォーター
1~3月

初夏クォーター
6~7月

冬休み
12~1月

夏休み
6~8月

初冬クォーター
11~12月

秋クォーター
9~10月

9月入学

Chapter 4

人生で3回大学に入る社会はどう可能か

日本の大学の盲点：社会人学生比率

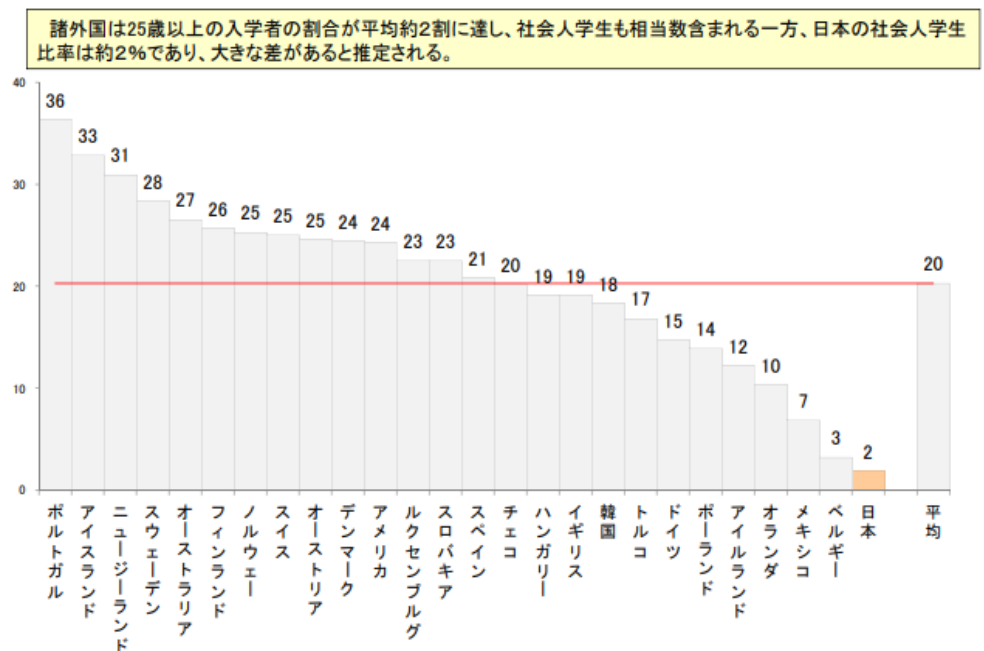
- 日本の大学の社会人学生比率の尋常ならざる低さ！
25歳以上入学者は2.5%、OECD25国中24位（ほぼ最下位）
- 「通過儀礼」装置としての大学（入試休暇、就活準備）
⇔ 「キャリアチェンジ」装置としての大学

● 数多のデメリット：

- 学生の同質性
- 学ぶ意欲の不可視化
- 社会との接点の弱さ
- 社会人学生＝少数派
- 志願者マーケティング

● 根底にある入試の神聖化と出口管理不在

25歳以上の学士課程への入学者の割合（国際比較）



人生と大学の結び直し: 3回大学に入る

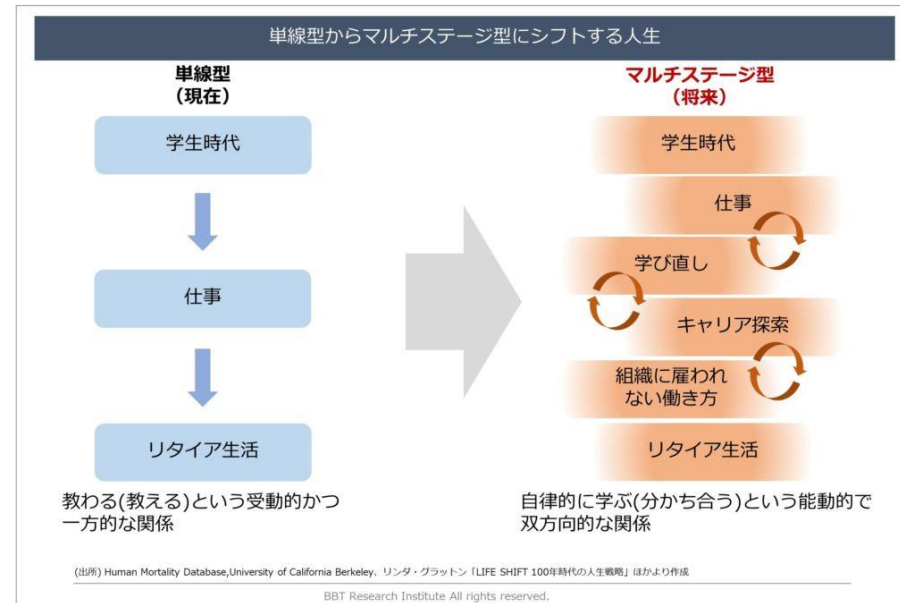
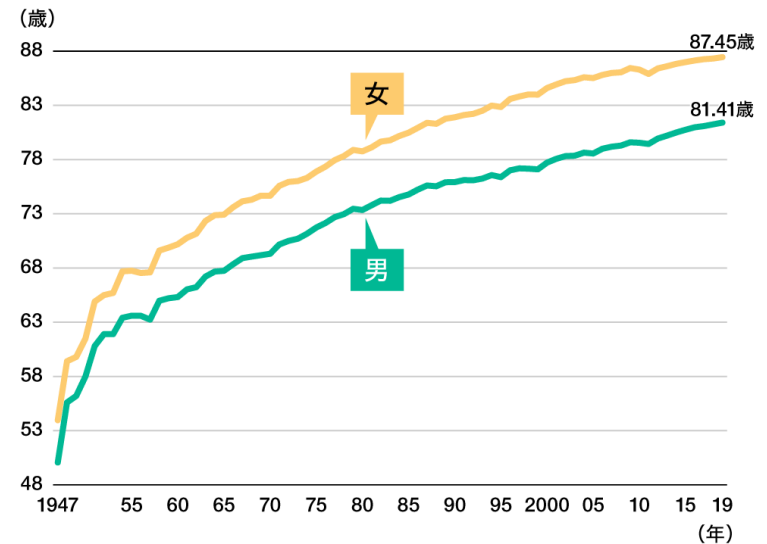
- 1回目: 18~21歳
- 2回目: 30~40歳代

就職した人が一渡りの現場を踏み、管理職に道を歩むか、全く違う道を見つけることに挑戦するかの転期。その時、もう1回大学に入り直し、何かを学んで違う人生を歩んでいく。

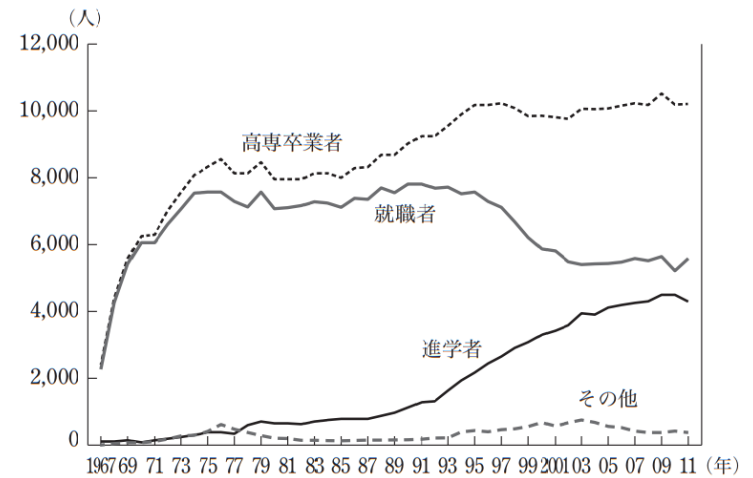
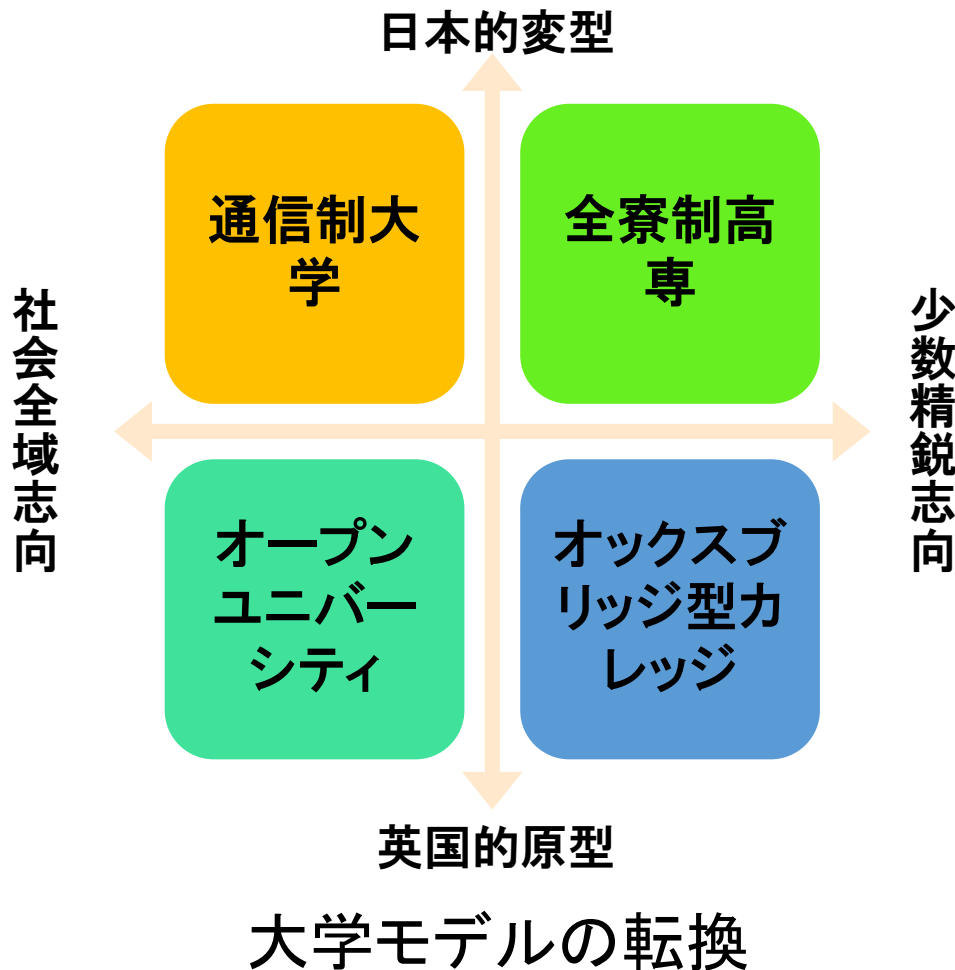
- 3回目: 60歳前後

職場のキャリアを終え、定年が見える。しかし、今は75~76歳まで元気。厳しくても何か全く違う人生に挑戦する。

平均寿命の推移

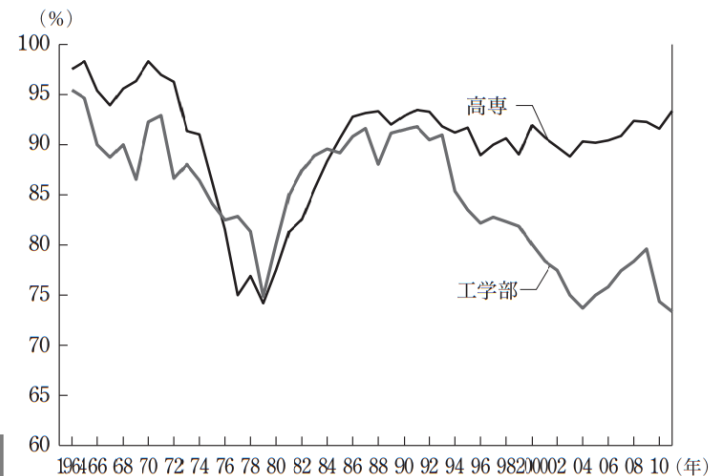


高等教育の複線的・異質的体制への転換



(出所) 新谷康浩「データで見る高専」(『IDE 現代の高等教育』2012年10月号)より作成。

図5-7 高専卒業者の進路



(出所) 図5-7に同じ。

図5-8 専門的技術的職業就職率の推移

頂点としての東大
大学教育を劣化・均質化させてきた入試信仰

Chapter 5

第三世代の大学は、地球人を創る

「役に立つ」とはどういうことか？

目的に対する手段として「役に立つ」こと

＝目的遂行的(＝手段的有用性)

目的・価値を創出することで「役に立つ」こと

＝価値創造的(＝価値反省的)

手段的有用性は、与えられた目的に対してしか、「役に立つ」ことができない。

→目的についての価値尺度が変わると「役に立つ」という合意は消える

- なぜ、ソニーはアップルになれなかったのか？ →日本の家電産業の没落
- 東京五輪2020の混迷 ← 東京五輪1964の価値軸の継続「速く、高く、強く」
⇒新しい価値軸としての「ゆっくり、末永く、愉快地」

価値創造的: 変化する多元的な価値の尺度を視野に入れる力

「目的遂行的知(工学系?) = 短く役に立つ」(3~5年)

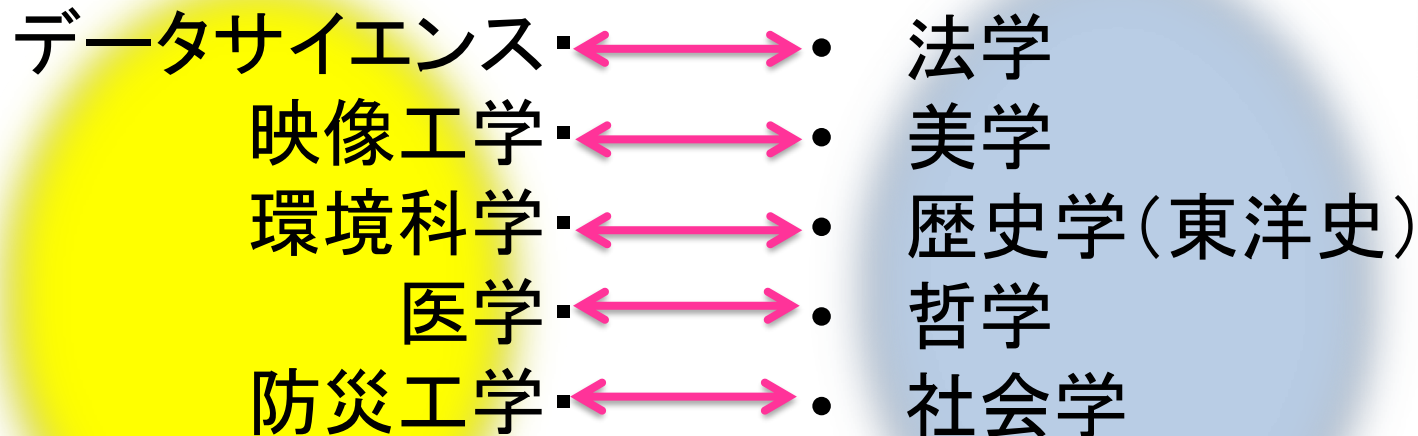
「価値反省的知(人文系?) = 長く役に立つ」(30年~1000年)

文理融合から文理複眼へ：21世紀の宮本武蔵

理系

価値創造的で目的遂行的な知

文系



1本目の刀

【モデルの装
置への実装】

2本目の刀

【テキストの精
密な読解】

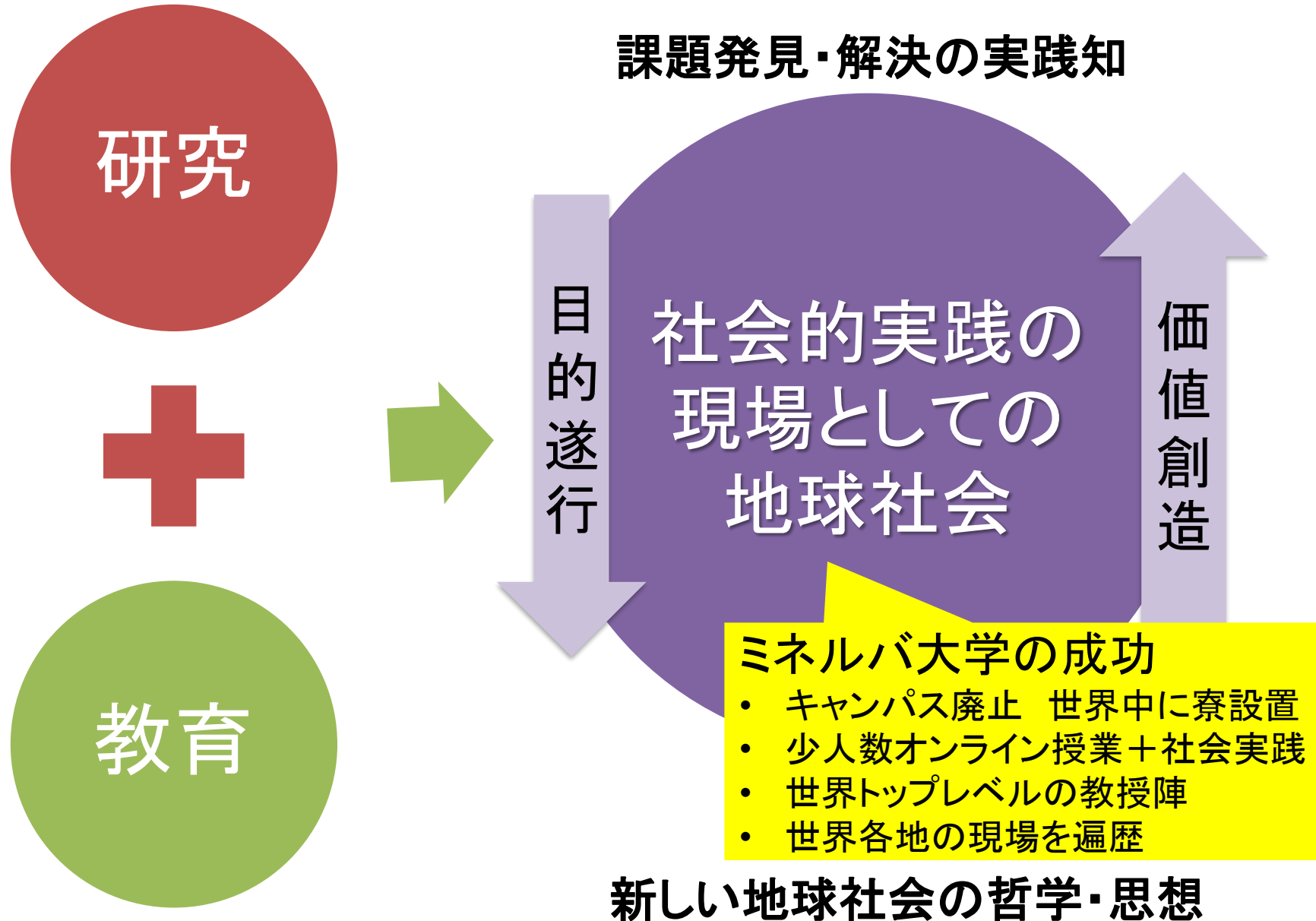
複眼的教育研究体制

メジャーマイナー／ダブルメジャー


学位プログラムは一元思考に陥っていないか？ →複眼的仕組みへ



第三の輪としての社会実践(参考 ミネルヴァ大学)



旅する宮本武蔵とトランスナショナルな大学

- 米国におけるダブルメジャー履修の拡大：
 - 学部生の25～40%:コースワーク+2つの専門
 - 典型的パターン:外国語+国際関係論/経済学+工学
 - 卒業後の収入アップ:離れた2つ>近い2つ>大学院
- ボローニャ・プロセス+エラスムス・プロジェクト
 - ボローニャ宣言(1999、47ヶ国)⇒汎欧州的教育圏構築
 - 全欧州的に通用する共通の学位制度、単位互換制度
 - 学生と教員の国を越えた移動=エラスムス(1987～):
 - 190万人の学生、9割の大学が参加(欧州委員会+大学本部)
 - 「ヨーロッパ的思考」を育てるカリキュラム構築
- Online+Hybrid Transnational Education(TND)の急拡大  コロナ・パンデミック
 - オーストラリアの大学による東南アジア圏大学生への英語による高等教育
 - より安価にオンラインをフルに活用してグローバルに通用する教育を提供

複数学部
への所属

複数大学
への所属

コロナ・パン
デミック

高等教育の複線構造化とグローカル化

新たな旅の時代=第一世代の大学に似る第三世代

第三世代大学の使命：地球人を創る

←国民/西洋人を創る

目的遂行的
な有用性

国民国家の未来から地球社会の未来へ

高等専門学校
アカデミー

グローバルな知的創造

医学、法学、
工学、経営学、
農学 etc.

環境、情報、
リスク etc.
課題発見の
実践知

グローバルな課題



地球社会の大学



グローバルな教養

国民国家の
大学

哲学、数学、
美学、人文学、
史学 etc.

新しい
地球社会
地球哲学・地
球史・地球文
芸

グローバルな知的遺産

ベルリン大学
フンボルト原理

価値創造的
な有用性

人文学の新たな使命

Conclusion

だが、話はそう簡単ではない

大学危機の構造：〈時間的存在〉としての大学



グローバル化

オンライン化

少子高齢化

複雑骨折から第二の死へ

新自由主義の教育改革：大綱化・大学院重点化・独法化
戦後教育の単線化：玉突き上げ底と旧制高校廃止
決戦体制に向けた理工系大拡張
「大学」 vs 「ユニバーシティ」

ボタンの掛け違い